

Title	デス エデュケーション ノ ガッコウ ゲンバ ニオケル テンカイ
Author(s)	アカザワ, マサト
Citation	生老病死の行動科学. 9 p75-p.82
Issue Date	2004
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11716
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

デス・エデュケーションの学校現場における展開

(大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程) 赤澤 正人

Abstract

Death is a part of life which children and adult need to know. However, Japanese children today are increasingly exposed to virtual experience of death in their environments, and they have been lost opportunities to experience practical death. So there has been the need for death education in schools to learn death and make realize values of life. death education has not been developed positively in school level, because there are many educational problems. Though, For example, we have no teaching curriculum and no time to provide education. Also, there are cries of alarm about unclear or damaging effects of this topic. To develop death education in schools, there is room for further investigation into many problems.

key words : death education, education, school, life and death

I はじめに

現在、わが国において核家族化の進行や病院死の増加、そしてマス・メディアが扱う仮想現実な死の増加といったことを背景として、現実的な死に関する経験や認識の不足がしばしば指摘される。

このような状況の中、わが国の学校現場で、デス・エデュケーションへの関心が高まってきている。しかし、これまでのところ、教え方がわからない、時間がないといった理由から、デス・エデュケーションの学校現場での積極的な実践には至っていない。

そこで本論では、デス・エデュケーションについて概観した後、日本の学校現場におけるデス・エデュケーションの展開について述べる。

II デス・エデュケーションの動向

デス・エデュケーションとは1970年代に登場した比較的新しい言葉である。ここでは時代背景からみたデス・エデュケーションの歴史とその目的について概観する。

1. デス・エデュケーションの歴史

死に関するあらゆる事項を勉強する領域に対してThanatology(死生学)という用語が一般的に用いられている。その接頭語のThanatoは、古代ギリシアで死を擬人化したThanatosという神に由来しているという。谷(1986)は、Thanatologyとは宗教、哲学、文学、芸術などの文科系の学際的な関わりから、死に関して総合的、総括的に構築された学問分野であると述べている。

デス・エデュケーションはそうしたThanatologyを背景として、さらに生物学、医学、遺伝子工学などの生物系学科、社会学、心理学、人文科学などの社会科学系などをも包括した、広範な学問領域の研究を意味している(谷, 1986)。つまりデス・エデュケーションは、Thanatologyの実践段階であり、個人的には体験できない死を、身近な問題として考え、生と死の意義を探求し、自覚を持って自己と他者の死に備える心構えを習得する教育である(デー

ケン, 2001)。

デス・エデュケーションという言葉がいつ頃から使われるようになったかは明らかではないが、データベース Web SPIRS Version 4.3 (Ovid Technologies Inc, 2000) で「death education」をキーワードに検索すると、論文のタイトルとしては、Levinton (1969) の「Need for death education and suicide occurrence」で初めて登場している。

デス・エデュケーションが盛んに行われている国としてドイツとアメリカを挙げることができる。そこでドイツについてはデーケン (1986a) を、アメリカについては Combs (1981) と Durlak & Riesenberg (1991)、及び若林 (1986) を参考に、それぞれの国でのデス・エデュケーションのはじまりに関して述べる。

ドイツは、中世の頃から教会の説教で、いかにして死への心構えを見つけるかといった具体的なアドバイスが提供されてきており、デス・エデュケーションの伝統を有する国である。また音楽、美術、文学といった芸術や文化においても、死は重要なテーマとして取り上げられてきており、デス・エデュケーションは日常の中で行われていたといつてよい。しかしながら、このような伝統を持つドイツでも 20 世紀に入ると死はタブーとなり敬遠され、家庭での看取りの機会も減少し、デス・エデュケーションの機会が稀になってしまった。そのため、1970 年代後半から、学校の授業の中でデス・エデュケーションを提供する必要性が広く認識されるようになり、宗教教育の枠内ではあるがデス・エデュケーションが行われている。ドイツで強調されているのは、特定の死生観を押し付けるのではなく、生と死に関する自立した思考を促す指導である。

他方、アメリカでは死は性とともに長い間タブー視されてきた。しかしベトナム戦争、高齢化、医療技術の進歩といった社会状況の中で、これまでほとんど考えられることがなかった生や死に関する問題について直視せざるを得なくなった。そうした時代背景の下、1969 年にロバート・フルトン教授は「死の教育と研究センター」を設立し、アメリカの死に関する研究の中心の一つとなっている。このセンターでは、医学、看護学、教育学、社会学、神学など各分野の専門家が集まり、「死」に関する共同研究が進められている。当初は成人を対象にした研究が中心であったが、現在では子どもの死や小学校のカリキュラムにまで研究範囲が広がり、年齢と学年に応じたカリキュラムと学習目標が設定され、研究されている。さらに 1970 年代からは研究のみに限らず、医学や看護学、教育といった現場で、積極的にデス・エデュケーションの実践を展開している。

このようにドイツ、アメリカのいずれの国も、死をタブー視していたことの反省から、デス・エデュケーションの必要性が唱えられ、様々な分野からの研究と実践が展開されているのである。

一方、わが国では 1995 年の阪神淡路大震災、1997 年の神戸市須磨区の小学生連続殺傷事件以降、ようやくデス・エデュケーションの動きが見られ始めたといつてよい。また少年による暴力行為や殺傷事件が相次いでおり、生きていることの大切さと、生かされていることの尊さが理解されていないのではないかという点も、デス・エデュケーションの必要性が高まってきた理由といえる (高木, 1999)。そして鈴木 (2000) は、子どもたちのいじめや非行、暴力などといった問題行動の解決という対処療法的な介入としても当然役に立つが、問題が生じないように予防的に関わる上でも、デス・エデュケーションは役に立つのではないかと述べている。以上のことから、現代において子どもたちが現実の死を体験する機会が減少したことや、増加

する子どもの問題行動を要因として、命の尊さや大切さを実感させることが求められるようになってきたことが、デス・エデュケーションを学校現場で展開する必要性が求められるようになった背景であるといえる。

2. デス・エデュケーションの目的

デス・エデュケーションは、前述したようにドイツやアメリカでは死を見つめなおすだけでなく、自分達の生き方を見つめなおすものとして、様々な分野から研究が進められている。

デス・エデュケーションの目的について考えてみると、その目的の一つに過剰な死の不安・恐怖の軽減が挙げられるが、死に対する不安・恐怖を完全に無くすることが目的ではない（デーケン, 1986b）。死は生命の終わりであり、不安や恐れを抱くのはむしろ自然なことである。そのため死の不安・恐怖の軽減のみに焦点を当てただけでは、デス・エデュケーションの様々な効果を検討することは不十分である。

ただし若林（1986）が指摘しているように、デス・エデュケーションはどんな死に方が良いのかという方向性を示すものでもない。死の不安・恐怖を軽減する以外のデス・エデュケーションの目的には、死を身近な問題として考え、生と死の意義を探究し、自覚を持って自己と他者の死に備えるための心構えをさせることがある（デーケン, 1986c）。同様に高木（1999）は、死をテーマとして、今生きていることの尊さを可能な限り理解し、実感させることがその目的であるとしている。また Hayslip & Cynthia（1993-94）や Levinton & Frenzt（1978-79）は、死を学ぶこと、生と死が無関係でないことを理解し、人生を見直すきっかけになり得ると述べている。また多くの論者が指摘しているように、デス・エデュケーションには、死を学ぶことによって生きることの大切さ・尊さを学ぶという、生命尊重の教育・生き方の教育という目的がある（柏木, 2001; 木村, 1990; 高木, 1999）。

デス・エデュケーションは、自分の生命をいかに最後までよりよく生きぬくかを考えるライフ・エデュケーションである（デーケン, 2001）と考えると、その目的は、死を学ぶことを通して命や生について考えるように促すことがふさわしいといえるだろう。デス・エデュケーションが到達すべきところは、自分の意志で人生の決定ができるようになるための情報の共有であり、死や喪失への健全な態度の発達であり、情動をコントロールする能力を高める効果的なコーピング方略の発達なのである（Pacholski, 1991）。

デス・エデュケーションが実践される場については、全てを学校で学ぶのではなく、それは一つの側面であり、家庭の中で学ぶことも多くある（中村, 2003a）。これらのことをまとめると、デス・エデュケーションは、学校や家庭という場所に限定されることなく実践されうるものであり、死を見つめ、生や死という問題から逃げるのではなく、自らそれに関する様々な問題を決定しうる人間、そして固有の価値を創造できるような人間を育てることを目指しているといえる。

Ⅲ わが国の学校現場でのデス・エデュケーション

ここで、デス・エデュケーションを学校現場の中でどのように取り入れられているかについて述べる。現在、わが国においてデス・エデュケーションの実践はまだ散発的に行われているにすぎないが（古田, 2002）、日本の学校現場でのデス・エデュケーションの動向を概観する。

1. わが国におけるデス・エデュケーションの実践例

わが国の学校現場において、自らが考えた教材と方法を用いて実践している教師が増えつつある。そしてその実践方法について、具体的内容を紹介したものが発表されている (e.g., 金森, 1996; 吹山・三宅・得丸, 2001; 古田, 2002; 中村, 2003b; 清水, 2003; 高木, 1999)。

例えば兵庫・生と死を考える会「生と死の教育」研究会が考案したカリキュラム (高木, 1999) には次のような例が含まれている。まず人間と動物の寿命の比較や、先祖を10数代さかのぼって書き出させて、命のつながりを実感させる授業である。また告知や臓器移植の問題を取り上げ、自分ならどのように答えるかを考えさせる授業である。他の実践者の授業の一例では、外部から妊婦やがん患者、医療現場に携わる人、高齢者などの講師を招いて、話を聞くことによって学びを深めるという授業がある (金森, 1996)。さらには性教育と関連させて、生命誕生の説明のみで終わるのではなく、沐浴人形などを用いた疑似体験的な授業で命の大切さの実感をもたせる授業も挙げられている (清水, 2003)。

デーケン (1986d) は、デス・エデュケーションは単なる知識の伝達にとどまるべきではなく、ワークショップなどを通して感情レベルの問題にまで取り組むことの必要性を指摘している。上述の実践内容をみると、デス・エデュケーションを実践している教師によって、死に関する情報や知識の伝達のみにとどまるだけでなく、対象者が自ら積極的に死について考えさせるような授業を展開する努力がなされていると考えられる。

このようにデス・エデュケーションの実践方法の事例集は出ているが、まだ学校現場で体系的に積極的な実践を行っているものは少ない。

2. 学習指導要領との関連

現在のわが国の学校公教育の教育内方針や内容は、文部科学省告示の学習指導要領と切り離せない関係にある。教育課程の基準とされている学習指導要領では、以下のように死をどのように扱うかを示している。得丸 (2000) によると、平成10年度に告示され、平成14年度から実施されている小学校学習指導要領の改訂版で、小学校四年理科の「内容の取り扱い」の項に、「植物の個体の死について触れること」を指示している。人間ではなく植物に限定されているが、学習指導要領で死について触れるように指示したのは初めてだということである。また小学校学習指導要領の解説、理科編の全学年目標では「さまざまな生き物に触れ、感じ、考えながら、それらを愛護し、生と死に直面して生命尊重の心情を抱くことが、自然を愛する第一歩となろう」と解説されている。さらに、学習指導要領の解説、道徳編に記述されている五・六学年の「内容項目の観点」では「人間誕生の喜びや死の重さ、生きることの尊さを知ることから、自他の生命を尊重し力強く生き抜こうとする心を育てるとともに、生命に対する畏敬の念を育てることが大切である」という解説文がある。これはデス・エデュケーションの目的としているものの一部が、現行制度では理科や道徳の中に含まれていることが分かる。しかし、死という表現は小学校学習指導要領のみに限られ、中学校、高等学校版においては死という語句は記述されていない。

このようにわが国の教育では、死や生を正規のカリキュラムで体系的に学ぶことはほとんどないといっても過言でない状況にあるといえる。

3. デス・エデュケーションの問題点

わが国におけるデス・エデュケーションに対して、多くの教師が、生命尊重につながること

や、より良く生きることにつながるといった理由で、学校教育の中で生や死を取り上げることが必要であると考えている(鈴木・野澤, 2000)。また松岡・屋麻戸・入江・英加・川上・小西・藤原(1995)は、教師が希望する性教育の内容は、命の大切さを扱うことが最も多いと報告している。しかし鈴木・野澤(2000)は、学校教育で人の死を取り上げることに対する教師の関心は高いとはいえないと述べている。このように、生と死を扱うことで命の尊さを教えることについて、教師はその必要性を感じているが、関心はそれほど高いとはいえない。しかしそのような中で、古田(2002)や西本(2000)、高橋(2000)のように、デス・エデュケーションの必要性を認識し実践している教師もいるが、全体でみるとその数はかなり少ないと思われる。

生と死について教える必要性を感じながらも実践には結びついていない理由は、多くの解決すべき問題があるからである(鈴木・野澤, 2000)。まず学校で生と死を扱うことへの根本的問題点として、そもそも教えるべきものであるかということと、学校現場の中で行うべきなのかという疑問がある(中村, 2003a)。中村(2003a)は、仮に学校現場で行う場合は、どの教科で扱うか、全ての教師が扱うのか、どのような教師が行うのかといった問題を解決する必要があると述べている。また得丸(2000)は、デス・エデュケーションの問題点としてカリキュラムの設定、教材の開発、タブー意識への対応などを挙げているが、最も大きな問題点は、「死」を教える教師の意欲と配慮であるとしている。さらに鈴木・野澤(2000)は教師がデス・エデュケーションの指導方法がわからないこと、時間的余裕が無いこと、宗教と関わることを問題点として挙げている。鈴木・野澤(2000)はデス・エデュケーションの展開に向けての前段階として、まず職員の研修ならびにカリキュラムの導入が急務であるとしている。これらの他に、子どもの発達段階に注意すること(高木, 1999)や、生徒の死別体験への配慮(古田, 2002)なども問題点として指摘されている。このようにデス・エデュケーションを実践するためには、まず解決すべき様々な問題点があることが分かる。

さらに考えられるのが、デス・エデュケーションの効果や弊害についての問題である。学校側はデス・エデュケーションが子どもたちの自殺の引き金になったり、何らかの問題の原因になったりする恐れを感じていることも否めない(得丸, 2000)。

諸外国においては、デス・エデュケーションの効果や影響を測定した研究は数多くある(e.g., Bailis & Kennedy, 1977; Bell, 1975; Combs, 1981; Durlak, 1978; Durlak & Riesenberg, 1991; Johansson & Lally, 1990; Miles, 1980; Murray, 1974; Schonfeld & Murray, 1990; Wittmaier, 1979; Yeaworth, Kapp, & Winget, 1974)。例えば、デス・エデュケーションを受けた後に、死の不安・恐怖が軽減したという報告がある(e.g., Durlak, 1978; Johansson & Lally, 1990; Miles, 1980; Murray, 1974)。その一方で、デス・エデュケーションを受けた後に死の不安・恐怖が増加したという報告がある(Bell, 1975; Combs, 1981; Wittmaier, 1979)。しかしながら、わが国においてそのような実証的研究はほとんど見受けられない。

デーケン(1986e)は、自分が受け持つ講義(デス・エデュケーション)の終了後には、学生の多くが死に対して積極的に考えたり、命の大切さを再認識したりするようになったと、その効果について述べている。このようにデス・エデュケーションの有用性が論じられることは多いが、その有用性は実証的データに基づいて示されることは少なく、主観的な感想が述べられることが多い。デス・エデュケーションの効果や弊害について実証的に明らかになるような関連研究が必要である。

以上のように学校現場でデス・エデュケーションを行うには多くの解決すべき問題点があり、

その対処方法を検討する必要がある。そのためには、デス・エデュケーションの実践経験がある教師から、実践の際に問題や困難に感じたことを具体的に明らかにすることで、問題点への検討が可能になると思われる。

IV おわりに

デス・エデュケーションとは、死を身近な問題として捉え、生と死の意義を探求し、自覚を持って自己と他者の死に備える心構えを習得することを目的とした教育である。日本におけるデス・エデュケーションの実践はまだ少なく、意欲ある教師が行っているのが現状である。その必要性は高いことから、学校現場でのデス・エデュケーションの展開を進めるためには、様々な問題点の克服のために、検討を行っていかなければならない。それと同時に、カリキュラムの検討や、その効果を明らかにする研究が必要であると思われる。

引用文献

- Bailis, L. A. & Kennedy, W. R. 1977 Effects of a death education program upon secondary school students. *The Journal of Educational Research*, 71, 63-66.
- Bell, W. D. 1975 The experimental manipulation of death attitudes: A primary investigation. *Omega*, 35, 199-205.
- Combs, D. C. 1981 The effect of selected death education curriculum model on death anxiety and death acceptance. *Death Education*, 5, 75-81.
- デーケン, A. 1986a 2.ドイツにおけるデス・エデュケーション 第四章 諸外国におけるデス・エデュケーション アルフォンス・デーケン (編) 死への準備教育第1巻 死を教える. メヂカルフレンド社. pp. 328-346.
- デーケン, A. 1986b 第六章 死への恐怖 アルフォンス・デーケン (編) 死への準備教育第3巻 死を考える. メヂカルフレンド社. pp.193-213.
- デーケン, A. 1986c 第一章 死への準備教育の意義—生涯教育として捉える アルフォンス・デーケン (編) 死への準備教育第1巻 死を教える. メヂカルフレンド社. pp. 1-62.
- デーケン, A. 1986d 第五章 死への準備教育のワークショップ・プログラム アルフォンス・デーケン (編) 死への準備教育第1巻 死を教える. メヂカルフレンド社. pp. 347-368.
- デーケン, A. 1986e 4.授業の中の演習—小作文と別れの手紙 第三章 死への準備教育の方法—対象と場に応じた教材 アルフォンス・デーケン (編) 死への準備教育第1巻 死を教える. メヂカルフレンド社. pp. 284-308.
- デーケン, A. 2001 生と死の教育 岩波書店.
- Durlak, J. A. 1978 Comparison between experiential and didactic methods of death education. *Omega*, 9, 57-66.
- Durlak, J. A. & Riesenber, L. A. 1991 The impact of death education. *Death Studies*, 15, 39-58.
- 吹山八重子・三宅冬実・得丸定子 2001 日本的のち教育の教材開発—小学校高学年向け教材— 教材学研究, 12, 136-138.
- 古田晴彦 2002 「生と死の教育」の実践 清水書院.

- Hayslip, B, Jr. & Cynthia, P. G. 1993-94 Effects of death education on conscious and unconscious death anxiety. *Omega*, 28, 101-111.
- Johansson, N. & Lally, T. 1990 Effectiveness of a death education program in reducing death of nursing students. *Omega*, 22, 25-33.
- 金森俊郎 1996 性の授業・死の授業 金森俊郎・村井淳志 性の授業死の授業. 教育資料出版会. pp. 13-155.
- 柏木哲夫 2001 ターミナルケアとホスピス 大阪大学出版会.
- 木村正治 1990 大学生を対象にした「死の教育」(Death Education) の実践とその評価 学校保健研究, 32, 443-450.
- Levinton, D. 1969 Need for death education and suicide occurrence. *Journal of School Health*, 39, 270-274.
- Levinton, D. & Frenz, B. 1978-79 Effects of death education on fear of death and attitudes toward death and life. *Omega*, 9, 267-277.
- 松岡弘・屋麻戸浩・入江悦子・英加純子・川上照代・小西敏子・藤原孝雄 1995 小学校性教育内容に関する意識調査—保護者・教師・児童はどんな性教育を望んでいるか?— 大阪教育大学教育研究所報, 10, 25-30.
- Miles, M. S. 1980 The effect of a course on death and grief on nurse's attitudes toward dying patients and death. *Death Education*, 4, 245-260.
- Murray, P. 1974 Death education and its effect of the death anxiety level of nurses. *Psychological Reports*, 35, 1250.
- 中村博志 2003a 「いのち」とともに「死」の教育を いのちの教育を考える 近藤卓(編) いのちの教育. 実業之日本社. pp. 98-101.
- 中村博志 2003b 第2章 デス・エデュケーションの研究—調査および結果の分析と考察— 中村博志編著 死を通して生を考える教育. 川島書店. pp. 9-92.
- 西本義之 2000 「死」を考える学習—地域の実情に合わせて 鈴木康明(編) 生と死から学ぶ いのちの教育 現代のエスプリ. 394. 至文堂. pp. 48-57.
- Ovid Technologies Inc. 2000 Web SPIRS Version 4.3. Ovid technologies Inc.
- Pacholski, R. 1991 The effectiveness of death education Morgan, J. (Eds.) Young people and death. Philadelphia: Charles Press Publishers, pp.191-202.
- Schonfeld, D. J. & Murray, K. 1990 The impact of school-based education on the young child's understanding of death. *Developmental and Behavioral Pediatrics*, 11 (5), 247-252.
- 清水恵美子 2003 いのちの教育 高校生が学んだデス・エデュケーション 法蔵館.
- 鈴木真由子・野澤朋代 2000 Death Education に対する教員の意識と学校教育における課題 新潟大学教育人間科学部紀要, 3(1), 11-19.
- 鈴木康明 2000 おわりに／生と死から学ぶいのちの教育 鈴木康明(編) 生と死から学ぶいのちの教育 現代のエスプリ. 394. 至文堂. pp. 193-201.
- 高木慶子 1999 心の教育 生と死の教育 教育現場で実践できるカリキュラム 兵庫・生と死を考える会.
- 高橋誠 2000 死への準備教育 鈴木康明(編) 生と死から学ぶいのちの教育 現代のエスプリ

リ. 394. 至文堂. pp. 146-155.

谷壮吉 1986 死への準備教育の場とそのあり方 7 医学教育 アルフォンス・デーケン (編) 死を教える. メヂカルフレンド社. pp. 158-170.

得丸定子 2000 学校で「死」を教える. カール・ベッカー (編著) 生と死のケアを考える. 法蔵館. pp.17-44.

若林一美 1986 アメリカにおけるデス・エデュケーション 第四章 諸外国における死への準備教育 アルフォンス・デーケン (編) 死への準備教育第1巻 死を教える. メヂカルフレンド社. pp. 310-317.

Wittmaier, B.C. 1979 Some unexcused attitudinal consequences of a short course on death. *Omega*, 10, 271-275.

Yeaworth, R., Kapp, F. & Winget, C. 1974 Attitudes of nursing students toward the dying patient. *Nursing Research*, 23, 20-24.